

実践報告

西洋音楽とクラシックギターの歴史を教材とした 「音楽科指導法」の授業実践報告

—文化的・歴史的な文脈を観点とした学び—

The Practical Report on “Methodology of Music Teaching (Elementary School)” Using the History of Western Music and the Classical Guitar
Music as Teaching Materials

—Learning from the Perspective of Cultural and Historical Context—

横山真理*, 藤間勘萃*, 生田直基**

Mari YOKOYAMA, Kansui FUJIMA, Naoki IKUTA

キーワード：西洋音楽史, クラシックギター, 文化的・歴史的な文脈

Keywords : history of western music, classical guitar, cultural and historical context

要約

本稿では、演奏を交えながら講義する形態を通して、学生が音楽の文化的・歴史的な背景の観点からどのように理解を広げたり深めたりしたのかを考察することを目的とする。そのために、「音楽科指導法」第13回の授業実践及び学生による授業後の振り返りの記述について報告する。結論は次のとおりである。学生は音楽やその音楽を奏でる楽器の文化的・歴史的な背景に関する知識を得て音楽的な見方・考え方を变えることにより理解を広げた。彼らは演奏者の表情や音楽的な躍動感を聴覚と視覚で直接感じながら音楽を鑑賞することにより理解を深めた。

Abstract

This report examines how the students broadened and deepened their understanding of music from the perspective of the cultural and historical background of music through the form of lectures with performances. To this end, we report on the 13th class practice of “Methodology of Music Teaching (Elementary School)” and the description of the students’ reflections after the class. The results are as follows : The students gained the knowledge

about the cultural and historical background of the music and the instruments that played the music, and broadened their understanding by changing the musical perspective. They deepened their understanding through appreciating music while directly feeling the performers' facial expressions and the musical dynamism, by the auditory and visual perception.

1 はじめに

21世紀は、人やその人が属する集団が有する文化的背景や文化的な特徴を尊重し認め合ったり学び合ったりしながら共感的に生きる社会を指向する時代である。保育・学校教育においても、日本で生活するすべての子どもに学習と発達の権利を保障する上で、多様な履歴や文化的背景をもつ子どもに共感し互いの文化を受け入れ交換しながら文化を創造していく視点がますます重要になっている。このような時代に、子どもの教育を担う専門職としての学校教師には、一元的で硬直的な文化観ではなく多元的で柔軟な文化観に基づき、多様な背景をもつ子どもや家族に対する洞察力や共感的理解の力を磨くとともに、文化的・歴史的背景を理解しながら教材研究を行い、授業実践を充実させていく力が求められているのではないだろうか。このような視点から、大学における教員養成課程に位置付く科目の授業内容を捉え直す機会も必要であろう。

本稿で報告の対象とした科目は、筆者が担当する小学校教員免許取得のための教職専門科目として必修となっている「音楽科指導法」である。この科目は、小学校での音楽科授業を実践するための指導法の具体及び学習指導案の作成に関する知識・技能を修得することを、15回の授業全体の学修目標の主眼としている。授業で扱う教材の中心となり児童の認識対象となるのは音楽であり、音楽は古今東西、その土地土地で暮らす人々が長い歴史の中で作り出し育んできた文化である。したがって、学生に対しては多様な音楽の多様な文化的・歴史的背景に対する洞察力をもって音楽に対する理解を深めることができるような機会を設けたいと考えてきた。このような考えから、2023年度より「音楽科指導法」の授業1コマ分を使って、西洋音楽の歴史的文脈の中でクラシック・ギター音楽を取り上げ、演奏を交えながらレクチャーする試みを外部講師との連携により始めている。外部講師の一人はバロックリュート演奏家であり作編曲家でもある藤間勘萃氏、もう一人はクラシックギター演奏家の生田直基氏である。本稿では、二人の外部講師との連携によって実現した2024年度春学期「音楽科指導法」第13回の授業実践及び学生による授業後の振り返りの記述について報告する。それにより、演奏を交えながら講義する形態を通して、学生が音楽の文化的・歴史的文脈の観点からどのように理解を広げたり深めたりしたのか考察することを目的とする。

2 報告

2-1 基本情報

本報告に関する基本情報は、以下のとおりである。

- (1) 科目と回 「音楽科指導法」第13回
- (2) 対象学生 本学教育学部教育学科学校教育専攻3年生60人
- (3) 実践時期 2024年7月3日(水)10時40分から12時10分
- (4) 実践場所 本学名古屋キャンパス134教室
- (5) 実践者 横山真理(科目担当教員)・藤間勘萃(外部講師)・生田直基(外部講師)
- (6) 第13回の学習目標

外部講師の器楽演奏を鑑賞し音楽の良さや美しさを体験することを通して、外部講師を活用した音楽科授業の意義について理解する。

(7) 内容

①講義1：本時の目標(横山)

本時の学修目標を確認し、音楽科授業を実践する教師が表現や鑑賞の直接的な音楽経験を通して音楽の文化的・歴史的背景を理解することの意義について説明した。

②講義2：西洋音楽の歴史(藤間)

2023年度の授業では、バロックリュート演奏を交えつつ西洋音楽史におけるリュートの栄枯盛衰の歴史を概説した。今年度はバロックリュート演奏家として演奏は行わず、作編曲家の立場から西洋音楽史の講義を行った。

③講義3：クラシック・ギター音楽の歴史(生田)

講義2における西洋音楽史の中でのクラシックギターの発展と楽器の進化の歴史、それに伴うクラシックギター音楽の特徴について、実際の演奏を交えながら概説した。

④学生による授業後の振り返り

Microsoft Forms を利用し、アンケートフォームの設問に対して自由記述の形で回答させた(回答数51人)。

2-2 「西洋音楽の歴史」の講義の概要

筆者(藤間)による講義の演題は、「クラシック音楽史異聞『古今東西-音げしき』」とした。この講義では、生田直基氏によるクラシックギター演奏を交えた講義に先駆けて、学生が西洋音楽の歴史を簡潔に概観できるように解説を試みた。

最初に、余りにその成り立ちが古く、実際に音として聞くことのできない時代のものを書物の記述で紹介した。それ以後の音楽については、音として聞くことができるようにはなったが各国でその音楽的な特徴や美しさが異なる。そのため、それぞれの時代の音楽の特徴を理解すること

ができるように、筆者（藤間）が作曲した曲を学生に聴かせながら時の流れを追って概説した。また、各項目ごとに日本の史実（以下、本文中では斜体で表記）にも触れ、西洋音楽との隔たりを軽減した。音楽の起源を考えると、まず直面するのは、今日のように音楽を録音したり再生したりする技術や楽譜が残っていない頃（仮に楽譜が残っていたとしても解読できない）については窺い知る事ができないという壁である。そうした初期の音楽については、遺跡から発掘されたり壁画に描かれたりしたもの、あるいは聖書などの書物に記された様子でしか窺い知ることができない。そのような理由から、これらの時代については次のようにまとめて学生に説明した。

旧石器時代（1万年以上前）。トナカイの足の骨でできた笛。新石器時代（5000年ほど前）、粘土でできた太鼓。青銅器時代（約3000年前）、ヨーロッパでは金属で作られたラッパ。メソポタミア文明、エジプト文明、インド文明、中国文明（5000年ほど前の古代文明）のもとでは、すでに小さなオーケストラ（2台のハーブ+歌い手、あるいは豎琴+ハーブ+太鼓+シンバルといった）があり、祭典、踊り、競技、食事や園遊会でのBGMとして演奏されていた。また、聖書の中にもこんなくだりがある。「琴を弾じ、銅鑼や鉦を打ち鳴らし、喇叭（らっぱ）をとりて」¹⁾。

西洋音楽史において重要な役割を果たしたグレゴリア聖歌（9世紀頃）は「音楽の始まり」とも言われるが、実際には音楽の起源ははっきりしていない。古い神話によれば「音楽は神々からはじまる」と伝えているほどである。旧石器時代から音楽が存在したのは確かなようだが、前述のように録音や譜面も残っておらず、それらがどのような音楽だったのか、定かではない。そこで本講義では、教皇グレゴリウス1世が6世紀末にまとめ上げて以来カトリック教会で歌い継がれている「グレゴリア聖歌」を西洋音楽の始まりとすることにして、その中から《ダヴィドの子にホザンナ》を聴かせた（音源1）。

このころ日本では聖徳太子が登場して飛鳥時代に入ろうとしていた。

イタリアで始まったルネサンス²⁾（1430年頃以降）という文化運動は、古代ギリシャやローマの文化に立ち返ることで人間の再生を目指すというものであった。「均整と調和」という考え方を包摂する「ルネサンス」という概念は、音楽だけでなく文学、美術、建築、自然科学などにも大きな影響を及ぼした。C. コロンブスはアメリカ大陸に上陸し、G. ガリレイは「動いているのは太陽ではなく地球の方だ」と地動説を唱え、L.d. ビンチが「モナリザの微笑み」を描いた時代であった。このような革新の時代にあって、音楽をする者にとって何よりも有益だったのは、J. ゲーテンベルクが印刷の仕方を発明したことであろう。なぜなら、この発明によりルネサンス以後の音楽は楽譜に形を変えて伝わることになったからである。講義では「楽譜は作曲家の夢見たものを書き記したものであり、食べ物に例えるならそれを冷凍することで、演奏はそれを解凍す

る行為である。解凍の仕方ひとつでそれがご馳走になるか、生ゴミになるか・・・」といった説明を試みた。

さて、この時代の音楽の一つに吟遊詩人（旅芸人）たちの歌がある。それらは今日の音楽で用いられる「長調」と「短調」といった調性の境目が曖昧であり、それ故にそれらの音楽は何だか古めかしくて素朴に聞こえる。講義では、イギリスのJ. ダウランドが作曲した《Come again! Sweet love doth now invite》（帰っておいで！優しい愛が今しも招く）を学生に聴かせた（音源2）。さらに、当時の西洋音楽と日本の時代背景とを結びつけるため、次のような一つの出来事を紹介した。所謂、「秀吉のアンコール」³⁾である。1582年、キリシタン大名の代理で4人の少年が天正遣欧使節としてヨーロッパに派遣された。伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノは8年後に帰国した折、教皇グレゴリウス13世に謁見する際に習うことのできた歌や楽器演奏を聚落第（秀吉の邸宅）にて秀吉に披露した。この時、J.d. プレ作曲《千々の悲しみ》という歌に秀吉はたいそう喜んで三たびアンコールしたとの言い伝えがある。この言い伝えを紹介し、音楽を聴かせた（音源3）。

続いて、バロック期（1600年頃以降）について解説した。この時代は劇的であり、一言でいうなら「均整と調和」を理想としたルネサンス時代への反動期であった。バロックとは「いびつな真珠」（ポルトガル語）を意味する。講義では、J.S. バッハが「音楽の父」と称される理由について、「彼は、いくつかの旋律どうしを紡ぎ合わせて曲に仕立てるポリフォニーという古い作曲の仕方をまとめ上げ、さらには今日の歌謡曲でも広く用いられている、主旋律に伴奏を添えて曲に仕立てるホモフォニーという作曲の仕方を始めた人であったから」と説明した。この説明は、西洋音楽史を詳しく学修した経験が乏しい学生向けにわかりやすさを優先して説明したものである。バロック期には、「シャコンヌ」も作られた。そもそも変奏曲では、もとなるメロディーを細かくしたり、拍子を変えてみたり、長調だったものを短調に（あるいはその逆に、短調だったものを長調に）と、様変わりさせて曲が展開されていく。このような変奏曲の一形態であるシャコンヌでは、もとなるメロディーに付けられた和音の並びを少したりとも変えないで、その上にいろんなメロディーが繰り出されていくといった格好をとっている。講義では、拙作のシャコンヌ《祇園祭り 宵山》⁴⁾を聴かせた（音源4）。

バロック時代が始まった1600年の我が国とはいえば、関ヶ原の戦いが勃発した頃である。そして出雲阿国が京都で歌舞伎踊りを始めたのもこの頃であるが、ただし、これは現在の歌舞伎とは反対に女性が男装して踊るというものだった。

古典派（1750年頃以降）であるが、前の時代を揺り返すのはいつの日も変わらない。古典派の音楽はバロック期の反動により、再び均整と調和を指向し、模範的で単純明快な音楽を目指す。

この時代からがいわゆる「クラシック音楽」と言えるのだが、今回の講義では、F.J. ハイドン、W.A. モーツァルト、L.v. ベートーベンなど、ウィーンの巨匠たちによる音楽作品については多様な場で視聴可能なこともあり、取り上げないことにした。

ちなみに、この頃の日本はまだ江戸時代の真ただ中であった。

ロマン派（1820年以降）の音楽になると、この時代の特色は主観的（自己表現、感情、創造力を重んじる）であり、叙情的（F. シューベルトの歌曲など、文学とも結合する）であると言える。F. ショパン、R.A. シューマン、F. リスト、J. ブラームス、P. チャイコフスキーといった作曲家たちの作品が咲き競ったこの時代は、産業化（機械と鉄道）の時代であると同時に、貧困や格差や人間疎外を人々にもたらした時代でもあった。大衆社会の中で個人が喪失したのは今日にも言えることであり、例えば個人の名前を呼ぶ代わりに「〇〇の先生、〇〇ちゃんのお母さん」などと呼慣らわすのはその典型であろう。そのような時代の流れを紹介しつつ、ここでは拙作《月の光が降り注ぐ逸話》を聴かせた（音源5）。

この時期、日本では1853年6月には浦賀港に黒塗りの軍艦4隻が姿を現した「ペリーの黒船」の事件が起こった。

黒船から連想的に関連をもたせ、長唄《宝船》を主題に用いた拙作《宝船遁走曲》⁵⁾を聴かせた（音源6）。事前に、次のような解説をした。

「正月の二日に宝船の絵を枕の下に敷いて寝ると初夢にいい夢がみられる」という言い伝えがある。大黒天、恵比寿、毘沙門天、弁財天、福祿寿、寿老人、布袋といった七福神と御宝を乗せた宝船の絵には、次の句が添えられている。「長き夜の 遠の眠りの 皆目ざめ 波乗り船の 音のよきかな」。この句を平仮名に変換して後ろから辿ると、同じくだりになり、これを「回文」と呼ぶ。

この曲を聴かせる前に、「長き夜の」の歌詞にあてがわれたメロディが、「フーガ形式」に則り、オーボエ、クラリネット、ファゴットといった楽器で繰り返し演奏されるのだが、「このメロディは一体、何回奏でられるだろうか」と学生に問いかけた。

19世紀末の音楽に入る。1874年パリで開催された第一回印象派展では、C. モネ、P. セザンヌ、E. ドガ、P.A. ルノワール等による絵画作品が咲き競っていた。それらの絵画の特徴は光と影の戯れ、具体的な輪郭より色合い、物事そのものよりも物事が人に与える気分や雰囲気に着目していた点にある。同時代のフランスの作曲家、C. ドビュッシーやM. ラヴェルも気分や雰囲気を音に紡ぎ、E. サティは「聴き流しの音楽」、言い換えれば「癒しの音楽」の作曲を思いつい

た。そこで、ここでは印象派の雰囲気をもつ拙作《鴨川の床涼み》を聴かせた（音源7）。

20世紀は、暴力支配と戦争による破局、人類滅亡の危機、貧富の格差拡大の時代であった。このような時代に作曲家が正直であろうとすれば、その作品が、先の見通せない救いのない時代状況よりも「より快く」感じられるような響きを生み出すことは困難だろう。そのような背景もあり、この時代の西洋クラシック音楽は、長調か短調かも分からない、何拍子かも分からない、言ってみれば「分けのわからない音楽」あるいは偶然性の音楽に辿り着くことになる。例えば、J. ケージが作曲したピアノ曲《4分33秒》がある。この曲は、舞台上に現れた演者が特にピアノを弾くわけでもなく、4分33秒を過ごして舞台袖へと引き揚げるだけの曲である⁶⁾。このような解説の後に、20世紀音楽の特徴を反映させ、コンピュータ上で様々な音げしきを散りばめた拙作の音楽劇〈オーバー・ザ・レインボウ〉から抜粋を聴かせた（音源8）。

最後に、第二次世界大戦後の音楽として、「五音音階」（ペンタトニック・スケール）を取り上げ、次のように解説した。

この頃の日本では昭和歌謡が花盛りであったが、一方でジャズやロックン・ロールといった洋楽も流行していた。ジャズやロックン・ロールといった洋楽の基盤となったのは、西洋クラシック音楽でなく、アメリカ奴隷制度のもとで生きていた黒人達の生活の中で生まれた「ブルース」という音楽であった。この「ブルース」(blues)とは、「憂鬱」という意味の英語を語源とする。音楽の構造上は至ってシンプルである。長調や短調の音階が7つの音でできているのに対して、「ブルース」の音階は5つの音だけで構成されている。このような「五音音階」は、奇麗なことに日本にも古くからあり、多くの民謡や童謡が「ブルース」の構成音による音階で作られてきた。

いつまでも聞こえている歌

作詞/作曲 藤間晴翠

楽譜1 《いつまでも聞こえている歌》
(作成：藤間)

講義の最後に、拙作《いつまでも聞こえている歌》(楽譜1)を聴かせ、曲の2番からは全員で歌った（音源9）。

2-3 「クラシックギターの歴史」の講義

(1) 講義について

筆者(生田)による講義の演題は、「クラシックギターの歴史」とした。ギターの中にも様々な種類がある。例えば、クラシックギター、エレキギター、アコースティックギター、フォークギターなどである。大衆的で一般的にも知られた楽器であるギターがどのように発展を遂げたかを

知る機会は、学生にとっては意外と少ないのではないだろうか。そこで、クラシックギターの歴史について実際の演奏を交えつつ講義を行う形態をとった。ギターの前身とも捉えることができる楽器の存在や、その後いつギターが生まれたか、その栄枯盛衰を時系列で説明すると同時に、演奏の視聴を通してクラシックギターによる音楽の歴史を感じつつ音楽の特徴や美しさを味わえるようにした。

まずは講義の内容を振り返る前に、クラシックギターの特性とギターの定義について説明する。

(2) クラシックギターの特性

弦楽器のうち、「弦を指、爪、義甲、撥、プレクトラムなどで弾く楽器」⁷⁾を撥弦楽器という。一方で、馬尾毛などを張った弓で弦を擦って音を鳴らす楽器を擦弦楽器という。ギターは、弦楽器の中でも撥弦楽器に属する。同じ弦楽器であるヴァイオリンやチェロなどは、弓を介して擦る擦弦楽器に属する。クラシックギターの特性としては、自身の指で押さえ撥弦することが挙げられる。つまり、左右両方の指で直接弦に触れて音を出すため、ギターは音の振動を手指で感じやすい楽器である。音量は控えめで持続しないのだが、そのような音の減衰する過程を楽しむことができる。このように、クラシックギターにおける音の儂さを伴う刹那的な美しさは、特筆すべきものがある。そういった楽器ゆえにクラシックギターの演奏が行われる主な舞台は、2,000人規模の大きな音楽ホールよりも数10人から500人ほどの規模のサロンや小ホールが多い。

(3) ギターの定義

ギターとは「有棹擦弦楽器の一種。大きさや形状は不定であるが、一般に8の字形の胴と、表面に滑らかな指板を貼った棹を持つ」⁸⁾と定義されている。しかし、ギターの定義について改めて考えると、そもそも弦は何本なのか、調弦はどのようにするのか、フレットはどうなっているのかなど、「ギター」という楽器を定義づける要素はいくつもある。さらに、現代においてギターといえば「弦は6本、通常調弦は6弦から順にE・A・D・G・B・E、フレットは半音間隔」などが条件となっている。したがって、電気信号を用いアンプを使うエレキギターも、スチール弦を使うアコースティックギター（フォークギター）、ナイロン弦を使うクラシックギターも、全てギターという楽器のカテゴリーに属することになる。筆者はクラシックギター演奏家であるが、クラシックギターも同カテゴリーに属する楽器である。しかし、現代の学生がクラシックギターの演奏の様子を視聴したり実際に演奏したりする機会は少ないのではないだろうか。

(4) 講義の概要

次に、講義の概要について説明する。講義では、ギターの歴史を①古代のギターの時代、②ギターとビウエラの時代、③クラシックギターの台頭の時代、④クラシックギターの進化の時代の4つに区分し、筆者による実際の演奏を交えながら時系列で解説した。

①古代のギターの時代

ギターの祖先の一つとして、今回はキターラまたはキタラ (kithara) という古代ギリシアの撥弦楽器を紹介した。キターラとは、「古代ギリシア、ローマ時代の撥弦楽器。リラに似ているが木製の箱型の共鳴胴で大型。ギター、ツィターなどの語源になったのはこのキタラである」と説明されている⁹⁾。名前の発音からもギターと類似性があり、木の胴体を共鳴させて音を出すという点においても、発音原理上の共通点がある。キターラのように胴体に弦を張って音を出す仕組みを有する古代の楽器は、世界各地で発掘されている。あるいは、ギリシア絵画などからキターラを持った人の姿が確認されている。しかし、実際にキターラで奏でられた音楽がどのようなものだったのか、音楽上の再現は極めて難しい。参考資料として、楽器のイラストを示す (図1)。

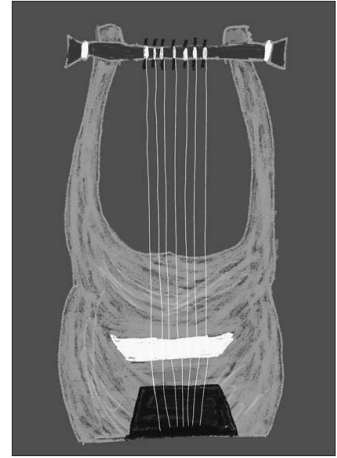


図1 キターラ
(筆者によるイラスト)

ギターのルーツに遡ったこの時代を扱うにあたり、ギターのルーツに対する知的好奇心が喚起されることを期待した。ギターは、弦を振動させ、ブリッジ(駒)を經由させてその振動をボディ(箱)に伝え音を共鳴させるという発音原理を有する。楽器の構造上、音程を変化させるフレットやそれを支えるネックもある。一方、キターラにはフレットやネックはないものの、ボディである木箱に糸を張って撥弦するという発音原理を有する。したがって、ギターとの類似性を容易に理解できるだろうと考えた。

②ギターとビウエラの時代

キターラに続き、ギターによく似たビウエラを紹介した。ビウエラとは「16世紀スペインの宮廷を中心に用いられた一種のギターで、6対あるいは7対の複弦を張り、標準的な音高は現行のギターより短3度高かったと考えられている」¹⁰⁾と解説されている。フレットを持ち、6コース¹¹⁾構造となっている点に、ギターとの構造上の類似性がある。当時、ビウエラはタブ譜¹²⁾を使って演奏されていたが、講義当日の筆者による演奏ではギター譜を使った。学生に対しては、演奏と併せて実際にタブ譜も提示することにより、演奏のために使用する楽譜への興味をもてることを期待した。

ここで演奏した曲は、L.d. ミラン作曲《パヴァーヌ》¹³⁾である。これは、ポリフォニー¹⁴⁾を用いて作曲された曲である。因みにミランが活躍した1500年代は宮廷で音楽が演奏されることも多く、人々はそこまで広くない空間で音楽演奏を楽しんでいた。解説だけでなく演奏を学生に提供した目的は、簡素ながら美しい旋律をギターで弾く様子を視聴することによりギターの「音色」の美しさに着目させることにあった。この曲であれば、ギター演奏を和声的ではなく旋律的に聴くことができ、ギターという楽器が本質的に持っている音そのものの美しさを感じてもら

ことができると考えた。また、空間のサイズという点では講義で使用する教室が宮廷と似たような広さのため、当時の時代におけるギター音楽の響きを感じ取ってもらえるのではないかと期待した。

③クラシックギターの台頭の時代

1800年代頃に、クラシックギターが台頭し始める時代を取り上げた。まずは、クラシックギターの前身とも言える小さなギターの紹介をした。この頃のギターは複数の楽譜の挿絵や資料から現代のギターとはほぼ同じ形であり、1コース複弦ではなく単弦であることが判明している。弦長は今よりも短く、胴厚は薄い。「19世紀ギター」「ロマンティックギター」とも呼ばれるこの時代のギター(図2)は、記譜法やチューニング(ピッチは現在と異なる)も現在と同じである。誰にでも親しみやすく比較的演奏が容易なロマンティックギターが誕生し、和音とメロディーが同時に演奏でき、かつ持ち運びが容易な楽器として大衆にも手の届きやすい楽器となり、ヨーロッパで大流行した。同時に、当時流行していたオペラの名曲から軍歌まで様々な旋律をモチーフにしてギターの曲が作曲、編曲され、この頃には現在でも演奏される重要なギターのレパートリーが生まれた。

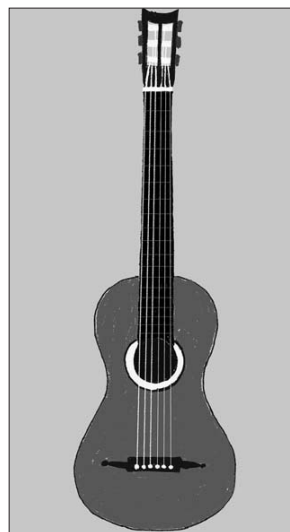


図2 ロマンティックギター
(筆者によるイラスト)

ここで演奏した曲は、F. シューベルト作曲《涙の讃美》である。原曲はピアノと歌のために書かれた曲であるが、今回はJ.K. メルツによる美しい編曲版¹⁵⁾で演奏した。《涙の讃美》のメルツ編曲版は先述のミラン作曲《パヴァーヌ》などよりも音数が多く、クラシックギターならではの奏法であるアルペジオ¹⁶⁾やハーモニクス¹⁷⁾を伴う名曲である。この曲の演奏を聴くと、おそらく学生の大多数が抱く現代の「ギター」のイメージ、すなわちジャカジャカと複数の弦を掻き鳴らすストローク奏法による和音伴奏の響きと異なり、旋律と和音を同時に奏でるクラシックギターの甘美な響きに焦点を当てることができるのではないかと考えた。演奏を視聴する学生には、クラシックギターが実際にどのような響きで聴こえるか感受することを期待した。

④クラシックギターの進化の時代

大流行したロマンティックギターからどのようにして現代のクラシックギターの形に進化し世界に広まっていったのか、またアコースティックギターやエレキギターがどのようにして誕生したのか。講義では、様々な要因を提示しながらその歴史を辿ることにした。要因については、主に下の三つを取り上げた。

一つ目の要因は、演奏が行われる舞台の大型化である。コンサート会場が大きくなり大きなコンサートホールでの演奏会が増えるとギターの音量そのものの大型化が求められ、モダンギター

と言われる現代のギターが登場した。これはスペインの巨匠、A.d. トーレスの功績が大きい。筆者が過去のコンサート（写真1）で使用した実物のトーレスの写真を所有していたため、当日の講義ではスライドで紹介した（写真2・写真3）。

二つ目の要因は、ギターの名手たちによる新たな演奏テクニックの構築である。大きくなったギターはそれまでのギターに比べると当然演奏も困難であった。しかし弦長も伸び、張力も増したモダンギターが持つダイナミックな音はそれまでの古典・ロマン派の音楽の表現力をより高め、且つその音色の多彩さによって、近代音楽に見られるような抽象的な表現も可能にした。モダンギターのテクニックを底上げた演奏家としてはまず19世紀後半にはF.

タレガが、その後20世紀にかけてM. リヨベート、A. セゴビアなどの名手達が登場した。それぞれ伝統を守りながらも新しい奏法を築き上げ、クラシックギターを大衆的な音楽のための楽器というだけでなく、クラシック音楽を奏でる楽器としてもその地位を押し上げた。

三つ目の要因は、ヨーロッパから世界への伝播である。どこでも演奏できる利便性からも大衆的な楽器とみなされてきたギターは、19世紀ごろから海を渡り、アメリカ大陸へと上陸する。アメリカ大陸ではブルース、ジャズといった音楽の中でギターが台頭した。また Martin や Gibson などアメリカを代表するギター工房なども設立されるなど、ギター製作も盛んになり、鉄弦（スチール弦）を張ったギターが増えた。結果的にスチール弦にすることで張力が増すため音量も増大し、ギターという楽器がブルース、ジャズ、ポピュラー音楽に至るまで様々なジャンルの音楽で使われるようになった。またその流れが世界的にも波及し、20世紀以降ギターは大衆の楽器としてその地位を確かなものにした。学生に対しては、参考資料として世界地図に簡単な流れを書いた資料（図3）を作成しスライドで見せた。



写真1 アンтониオ・デ・トーレス製作の楽器を実際に使った筆者の演奏会での模様（2021年8月28日 名古屋ギターフェスティバル実行委員会による撮影）



写真2¹⁹ トーレス製作のギター（写真3）に添付されたラベル



写真3²⁰ 演奏会（写真1）で筆者が使用したトーレス製作のギター

ここでは、メキシコの作曲家 M.M. ポンセが作曲した《南のソナチネ》より第2楽章及び第3楽章¹⁸⁾を演奏した。メキシコとフランスを往来したポンセは、近代的な音楽をベースとしつつギターの民俗的な魅力も見事に音楽に反映させている。《南のソナチネ》においては第2楽章では重く、切なく、語りかけるようなメロディーが登場し、第3楽章ではラスゲアード奏法から入り、ヘミオラのリズムが随所に取り入れられるなど変化に富んでおり、クラシックギターが奏でる音楽の色彩感をも表現する。この2曲には緩急があり、クラシックギターを初めて聴く、または音楽にあまり触れていない学生達でもわかりやすく鑑賞できるのではないかと考えた。

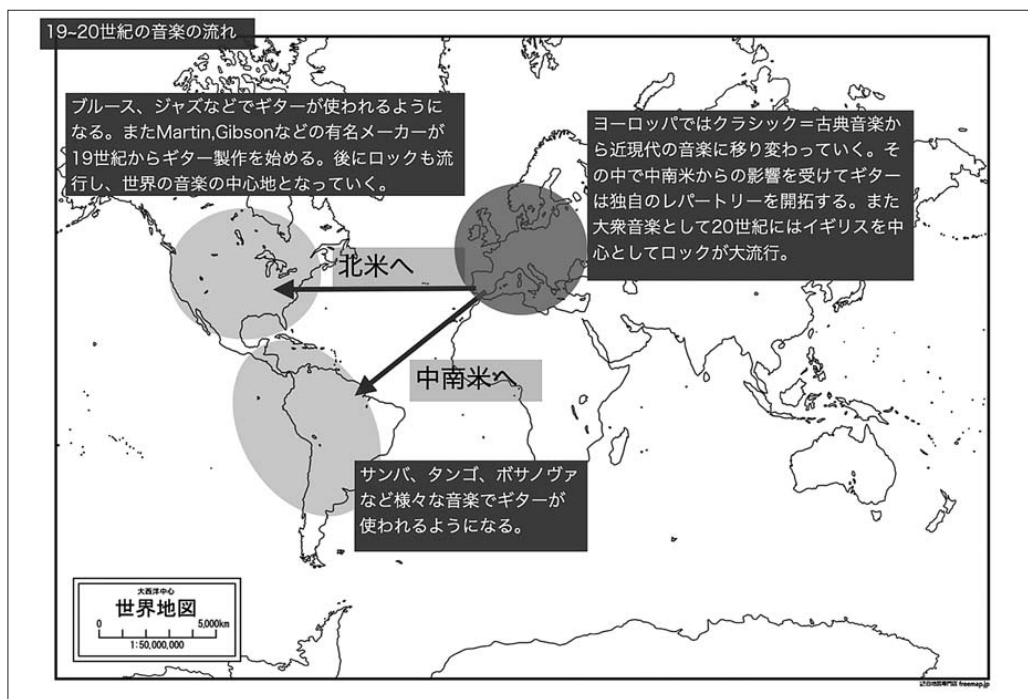


図3 授業で使用した世界地図²¹⁾

2-4 総括

講義後に学生が回答したアンケート結果から、クラシックギターによる演奏を交えながらギターの歴史を辿っていくスタイルの講義は、学生達にとって非常に有意義であったことがわかった。その理由として、キターラやビウエラの存在、そしてクラシックギターの発展までを大まかに理解する学生が多くいたことが挙げられる。さらには、「自分も箱に弦を張って音を出すという『発想』や経験を幼児の頃にしていることがある」などと考えた学生もいた。このように、想像力を働かせて楽器の文化的・歴史的背景を理解しようとし、昔の人も自分達と同じような発想をしていたのだと理解することは、音楽の歴史を学ぶ上でとても重要である。過去と現在で生活様式が大きく違っていてもその「発想」が同じであることに着目すれば、共感性並びに多様性も育むことができるのではないだろうか。また、今回のように実際にギターの音や演奏を肌で感じなが

ら当時の歴史に関する知識を得ることが、ギターをはじめとした音楽の歴史をより深く理解する手助けになるのであれば、このような講義を提供することは大きな価値があるだろう。

3 学生による授業後の振り返り

講義終了後、本時の学修の振り返りができるようにいくつかの質問を設定し自由記述の形で回答させた。以下、記述の例を示す。

表1 質問 A 「西洋音楽の歴史の講義で一番記憶に残っている内容と理由」に対する記述の例

質問 A に対する記述の例
簡単な楽器ができていたのが、1 万年以上も前だということが最も印象に残っている。はるか昔の人々も音を通じてつながりあい、そして楽しんでいたのを想像すると今我々が様々な音楽を楽しんでいるのと全く同じだと思ったから。
海外の音楽を昔から遡っていきながら同時に日本の時代の音楽を比較してかけて昔の海外と日本の音楽の違いを感じることができた。特に Come again! Sweet love doth now invite と千々の悲しみの聴き比べが記憶に残っている。
はじめに説明された今ではもう聴けなくなってしまった音楽たちが印象に残っている。まだ獲物を狩って生活していた時代からその獲物の残ったものを利用して楽器を作ったり、その時代で手に入るものだけで楽器が作られていたりして、音楽は人間の人生そのものなのだと感じた。
旧石器時代から楽器があったことに驚いた。1 万年以上前から人は私たちのように音楽と触れ合っていたと思うと不思議な気持ちになった。音楽の始まりははっきりとしていないことからわからないほど昔なことが分かり感動した。最後にみんなで合唱した時大学に入って合唱したのが初めてだったため懐かしい気持ちになり嬉しかった。

表2 質問 B 「西洋音楽の歴史を知るとは、私たちにとってどのような意味があると考えるか」に対する記述の例

質問 B に対する記述の例
世界の始まりは西洋やアフリカからということがよく言われるように、人とともに成長してきた音楽の起源もそのあたりにあるかもしれない。今は誰でも気軽に触れられる音楽がどういったものだったのかをすることは面白いし大切だと思う。
音楽の始まりからどういった経緯で今の音楽へなったかなど今までに聞いたことのない知識を得ることができるため、音楽を好きになれることなのではないかなと思う。
私は音楽の歴史を知ることによって昔の人がどんな曲を聴いていたのか理解でき、音楽に親しむことができた。そのため、音楽に親しむことができる利点があると考えた。また、音楽の特徴は歴史の人たちの感情が影響していると考えた。
西洋の音楽の歴史を知ることによって、今まで何となく「外国の音楽家」として捉えていた人たちがそれぞれ違う時代の違う音楽を作っていたこと、それぞれの音楽に対する理解の深まりや尊敬が起ったので、同じようなことが子どもも感じられることには意味があると思う。

表3 質問C「クラシック・ギター音楽の歴史の講義で一番記憶に残っている内容と理由」に対する記述の例

質問Cに対する記述の例
1500年ごろにギターが流行したことを初めて知った。 <u>大航海時代などが影響しているのかな</u> と思い、 <u>世界史の影響を受けている</u> と思った。
自分はアンコールのシャンゼリゼが1番記憶に残っている。最後ということもあると思うけれど、 <u>ギター一本であれだけの完成度の高い音楽ができるなんて</u> 思っておらず、とても感動した。
<u>古代のギターの説明が印象に残っている</u> 。1世紀頃からもう似たような楽器があったことに <u>驚きを感じた</u> 。しかしまだ弦をただ張っただけで張った弦の特定の音しかだせないところに時代を感じた。

表4 質問D「クラシックギターの演奏の魅力はどのようなところにあると感じるか」に対する記述の例

質問Dに対する記述の例
自身の爪を用いて演奏するため演奏する人によって音色が変わるところ。
メロディーと伴奏を組み合わせ、 <u>一人で、ひとつの音楽を演奏できる</u> ことと、 <u>そうできる</u> ことで、色々なジャンルの音楽が演奏できるところに、魅力があると感じた。
弾き方さえ身につければだれでも簡単にどこでも弾くことができるところにあると感じた。一旦弾けるようになって、もっとテクニックもいろいろあって初心者から上級者まで何歳でも楽しめると思った。また、ギターといえば弾き語りみたいなところが自分の中ではあったので、 <u>いろいろなギターの曲がある</u> と知れてギターに対する見方が変わった。
音色が柔らかく、 <u>演奏によってテンポアップな音楽からゆったりした音楽まで幅広い音色を表現</u> できることが魅力であると思う。また、 <u>弾くだけではなく、楽器をたたいたり、弦を擦ったり</u> 様々な表現方法があることも魅力だと思った。
鳴らし方によって音のなり方が全く違うところだと思う。悲しげな雰囲気や、 <u>反対に賑やかな感じを弦の抑え方や弾き方によって表現できるのがとても面白い</u> と感じた。私自身もギターを買ってやってみたときがあったが難しくて諦めてしまったので、また挑戦してみたいと思った。

4 おわりに

本稿では、演奏を交えながら講義する形態を通して、学生が音楽の文化的・歴史的文脈の観点からどのように理解を広げたり深めたりしたのか考察することを目的としていた。そのために、「音楽科指導法」第13回の授業実践及び学生による授業後の振り返りの記述について報告した。以下に考察するように、一つには、音楽やその音楽を奏でる楽器の文化的・歴史的背景に関する知識を得て、音楽的な見方・考え方を变えることにより理解を広げたことがわかった。二つには、演奏者の表情や音楽的な躍動感を聴覚と視覚で直接感じながら音楽を鑑賞することにより理解を深めたことがわかった。

初等教育教員養成課程としての音楽科カリキュラムにおいては、中等教育教員養成課程のよう

に音楽史や楽器の歴史を掘り下げ重点的に理解する学修内容は位置付けられていないことから、音楽やその音楽を奏でる楽器の文化的・歴史的背景に思考を向ける機会は恵まれているとは言えない。一方で、本授業実践のように西洋音楽史とクラシックギター音楽の文化的・歴史的な文脈に焦点を当て演奏を交えながら講義するという形態により、学生は西洋音楽史や楽器の進化の歴史に関する知識を得て、リアルな場で楽器演奏それ自体を直接的に鑑賞することができた。その結果、前掲の表1、表2、表3中の波線の記述例にあるように、音楽やその音楽を奏でる楽器の文化的・歴史的背景に関する知識を得て音楽的な見方・考え方が変わり視野の広がりを自覚する学生が出現した。同時に、前掲の表3、表4中の直線の記述例にあるように、演奏者の表情や音楽的な躍動感を直接的に感じながら音楽を味わうことができた点に驚きや楽しさを感じる学生が出現した。このように、演奏を交えた講義形態における音楽の文化的・歴史的な文脈を観点とした学びが学生の音楽的な見方・考え方を変えるという示唆は、今後の初等教育教員養成課程としての音楽科カリキュラムの再構築の手がかりとなることが期待できる。一方で、以上に考察した学生の音楽に対する理解の広がりや深まりについては、取り上げた記述例に限って根拠を明示したが、詳細な分析を行うことができなかった。今後の課題としたい。

注

- 1) 旧約聖書の詩篇(150篇)では、様々な楽器を用いて神を賛美する様子が以下のように記されている。「3節 ラッパの声をもって主をほめたたえよ。立琴と琴とをもって主をほめたたえよ。4節 太鼓と踊りとをもって主をほめたたえよ。緒琴と笛とをもって主をほめたたえよ。5節 音の高いシンバルをもって主をほめたたえよ。鳴りひびくシンバルをもって主をほめたたえよ」。WEBサイト「You Version」Bible.com (2024年10月3日閲覧)。
- 2) 「ルネサンス」(仏語 *renaissance*)とは「古代との意識的出会いによる人間の〈再生〉を意味する」と定義されている(U. ミヒェルス, 1989)。
- 3) 「秀吉のアンコール」の言い伝えに関しては、高田重孝によるnoteでの説明が詳しい。https://note.com/shigetaka_takada/n/ncd5cb0fc657d (2024年10月3日閲覧)。
- 4) 藤間勘琴作曲《祇園祭り～宵山～》は、シャコンヌの形式をとっている。初めにもとになる8小節のメロディーが聴こえ、それをAとすると、A—B—A—C—A—D—Aというように曲が進行する。
- 5) 曲名で使用した「遁走曲」とは、バロック時代の音楽形式の一つである「フーガ」の和名である。
- 6) 偶然性の音楽の例として、「金魚鉢に浮かび上がる音楽」がある。五線譜の書かれた金魚鉢に入れられた金魚の動きを音符に見立て、演奏者がそれを楽器でなぞって演奏する。
- 7) 堀内久美雄, 1991. 撥弦楽器. In: 堀内久美雄編, 新訂 標準音楽辞典 トーワ索引. 音楽之友社. 1395.
- 8) 堀内久美雄, 1991. ギター. In: 堀内久美雄編, 新訂 標準音楽辞典 アーテ索引. 音楽之友社. 471.
- 9) 同上書. 475.
- 10) 前掲書7). 1510.
- 11) 弦楽器における「コース」とは、同音またはオクターブに調弦された数本の弦のひとまとまりを指す。

- 12) タブ譜とは、ギターなど弦楽器のために弦を押さえる位置を数字や記号で示した楽譜を指す。
- 13) Luis de Milán, 1536. “Pavane I”. 全音楽譜出版社出版部編, 2009. ギターベーシックレパートリー 100 選 I, 全音楽譜出版社. 47。
- 14) ポリフォニーとは、多声音楽のこと。中世やルネサンスによくみられる。
- 15) Schubert, F. P. Mertz, J. K. 1845. “Lob der Thränen” from “6 Schubert’sche Lieder für die Gitarre” Simon, Wynberg, 2005 *JOHANN KASPAR MERTZ Guitar Works Volume VII SIX SCHUBERT SONGS arranged for solo guitar by Mertz*, Chanterelle Verlag Press. 10-11
- 16) アルペジオとは、分散和音の一種であり、和音を低音または高音から順次に奏することである。
- 17) ハーモニクスとは、弦楽器の弦に特殊な技巧を加えて出す、笛のような音色を持つ倍音を指す。
- 18) Ponce, M.M, 1930. “Sonatina Meridional” II Campo, III Fiesta. Schott Musik International, 1967 *Ponce Sonatina meridional*, Schott Musik International Press. 7-10
- 19) 筆者が写真2を撮影し、ギターを所蔵している荒井貿易株式会社の許可を得て掲載した。
- 20) 筆者が写真3を撮影し、ギターを所蔵している荒井貿易株式会社の許可を得て掲載した。
- 21) 白地図専門店 (<https://www.freemap.jp>) (2024年6月30日閲覧) を用いて筆者が作成した。

音源

- 音源1 《ダビッドの子にホザンナ》CD POCL-2548: グレゴリオ聖歌集〔聖週間の音楽〕演奏: スコラ・アンティクワ: 1987, 1989 (発売: ポリドール株式会社)。
- 音源2 《Come again! Sweet love doth now invite》演奏 / ソプラノ: 太田尚見、リュート: 藤間勘琴。
- 音源3 《千々の悲しみ》演奏 / ソプラノ: 加藤佳代子、ヴィオラ: 吉田浩司、リュート: 藤間勘琴。
- 音源4 藤間勘琴作曲《祇園祭り 宵山》演奏 / ヴィオラ: 吉田浩司、ピアノ: 加藤真弓。
- 音源5 藤間勘琴作曲《月の光が降り注ぐ逸話》演奏 / フルート: 石川直子、ヴァイオリン: 大橋淑恵、箏: 樽本里美、十七弦: 戸田弘子、ピアノ: 牛田小秩子・藤本逸子。
- 音源6 藤間勘琴作曲《宝船遁走曲》デジタル音源 / 制作: 藤間勘琴。
- 音源7 藤間勘琴作曲《鴨川の床涼み》演奏 / ヴィオラ: 吉田浩司、リュート: 藤間勘琴。
- 音源8 藤間勘琴作曲〈オーバー・ザ・レインボウ〉より《灰色の子供たち》他。
- 音源9 藤間勘琴作曲《いつまでも聞こえている歌》演奏 (G dur) / ソプラノ: 太田尚見、リュート: 藤間勘琴。

引用・参考文献

- 堀内久美雄編, 1991. 新訂 標準音楽辞典 アーテ索引. 音楽之友社
- 堀内久美雄編, 1991. 新訂 標準音楽辞典 トーワ索引. 音楽之友社
- U. ミヒェルス, 1989. ルネサンスと人文主義. In: 角倉一朗監修, U. ミヒェルス編, カラー図解音楽事典. 白水社. 220

謝辞

生田氏を通じて貴重な楽器の写真の掲載をご許可いただいた荒井貿易株式会社様に、筆頭執筆者より紙面を借りて感謝申し上げます。

付記

本稿で取り上げた学生による振り返りの記述については、受講学生全員に対して事前に口頭及び文書で説明の上、同意を得た学生の記述のみ抜粋し匿名化して記載した。また、本学研究倫理委員会の承認（受付番号 2024-13）を得ている。

本稿は、2-2 を藤間勘萃、2-3 を生田直基、それ以外を横山真理が執筆した。全体の監修は横山に依り、内容については3人で協議した。